

平成 27 年度 推薦入試試験問題（第一部 商経学科）解答例

問 1 (30 点)

【採点のポイント】

- ・文脈にそって、礼儀の内容が書かれているか。ただし、何に対するどのような礼儀であるのかについては、自由に発想してよい。

【解答例】

自分の子どもたちが初めて、祖父母のふるさとを訪ねる時、どのような交通手段で行くのか、という問題である。交通が発達し、短時間に快適に行く方法もあるが、やはりなるべく、祖父母の体験に近い方法がよいと考えた。もちろん当時と全く同じ交通手段はないであろうが、それに近いものを選び、故郷の「遠さ」を体験させることが「礼儀」なのである。

問 2 (30 点)

【採点のポイント】

- ・図を参照して枕崎・伊集院の位置関係が把握されているか。
- ・陳情団の目的地が東京であり、鹿児島本線に乗れば、上京できることが把握されているか。
- ・海の上の国境を越えても最終的には上陸しなければ、密入国できず、目的を遂げることができないことが把握されているか。

【解答例】

奄美からの陳情団が薩摩半島に上陸するとすれば、どこに上陸しても、陳情団の最終目的地である東京に行くために、鹿児島本線に乗る必要がある。そのため、南薩鉄道を使えば伊集院駅で乗り換えることになる。したがって、薩摩半島の西海岸に上陸し、東京をめざす人たちを捕らえるためには、伊集院駅は要駅となる。

問 3 (40 点)

【採点のポイント】

- ・現代の世界で起きていることをふまえて論じているか。例えば、以下のような観点に立って述べることを求める。
 - ・国境をめぐる近年の事象について触れていること。
 - ・具体的な事例がなくても、線を引いて国を分かつことの意味について触れていること。
 - ・島国である日本から見た国境の抽象性について触れていること。
 - ・その他、国境について自分なりの考えを述べていること。

【解答例1】

私は、これまで国境について考えたことはない。なぜなら意識することがなかったからである。日本でも領土をめぐる問題がいくつかあるようであるが、どの件でも、領土問題の存在について、一つの相手国はある、といえ日本はないという。日本があるといえ、違う相手国はないといっている。

しかし、今、日本をめぐる起きている問題は、まさに領土の問題であって、出題文で言っている「国境」と少し異なるように思う。この文章では「国境」は人と人をわける線として存在している。かつて鹿児島県民を分断する線として国境線が引かれたのである。奄美の人を逮捕した警察官も、終戦の前までは同じ県民であったのだ。それが戦後、線引きによって、外国人にされたのである。

こうなると国境というものは人を不幸にする線でしかないような気がする。国があるのはいいことだと思うが、国と国が線を引き合っってその間に住む人々に苦勞を強いているのである。

【解答例2】

国境といわれると、今年起きた、ウクライナの問題を思い浮かべる。ウクライナ政府がヨーロッパと親しくする方向を選んだので、ロシア系住民の多い地域がそれに反発したのである。それで、クリミア半島がロシア領に編入されてしまったのである。

多くの人が賛成すれば、隣の国に編入してもよいということについて、どう考えればよいのだろう。文章の奄美の人たちも米国占領下から日本への復帰、つまり日本への編入を望んだのである。これを是として、クリミアの人を非、とすることができるだろうか。

クリミアのことは詳しくわからないが、奄美や沖縄は確かに、敗戦前までは日本だったのでそれでよいだろう。でも、昔はそうだったといってしまうえば、ユーラシア大陸の大半はモンゴルのものになってしまう。アレキサンダー大王を考えればインドまでマケドニアのものになってしまう。とすると今住んでいる人たちの意思を重視するしかないのかなと思う。そうするとウクライナ東部はロシア領になってしまう。

国境など気にせず、自由に往来していた時代がうらやましい。